

# 第1回～第39回

## ☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和46年10月4日～ 昭和47年6月26日	月	21時00分～ 21時56分

司会:加東大介 (第1回～39回)  
山東昭子 (第1回～26回)  
松任谷国子(第27回～39回)

## ☆凡例☆

- |             |       |
|-------------|-------|
| ①サブタイトル・放送回 | ②出演者  |
| ③曲目(歌唱者)(※) | ④放送概要 |

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で(出演順)と記入)

昭和46年

昭和46年10月4日

- ①「藤山一郎・40年の栄光」 #1
- ②島倉千代子、ジャッキー吉川とブルー・コメッツ、松尾和子、バーク佐竹、仲宗根美樹、小畑実、藤山一郎、池部良、伊豆肇、杉葉子、若山セツ子、坂本九
- ③ **(出演順)**「からたち日記」(島倉)、「ブルーシャトー」(ブルー)、「誰よりも君を愛す」(松尾)、「女心の歌」(バーク)、「川は流れる」(仲宗根)、「湯島の白梅」(小畑)、「丘を越えて」(藤山)、「東京ラブソディ」(藤山)、「懐しのボレロ」(藤山)、「長崎の鐘」(藤山)、「青い山脈」(藤山)、「見上げてごらん夜の星を」(坂本)、「赤とんぼ」(全員)
- ④ 日本における愛唱歌、ヒット曲、名曲をいろいろな角度から取り上げる歌謡番組。主として、昭和の歌を対象としている。司会は歌謡番組初登場の加東大介と、山東昭子。

番組は、第一部では毎週幅広く各出演者に思い出のヒット曲を歌ってもらう“思い出のヒットパレード”、第二部は一人のスターをゲストに迎え、歌にまつわる思い出などを語ってもらう“今週のハイライト”、第三部は視聴者や有名人からリクエスト曲をつのる“私の心の歌”で構成する。

第一部では、島倉千代子が「からたち日記」、小畑実が「湯島の白梅」を歌う他、ブルー・コメッツ、松尾和子、バーク佐竹らが出演する。

第二部は、“藤山一郎四十年の栄光”と題して、歌謡生活40年の藤山一郎が登場する。まずは思い出の歌として「丘を越えて」を聞いた後、司会の加東と藤山の友情の話に話題が及ぶ。続いて「東京ラブソディ」「懐しのボレロ」「長崎の鐘」と三曲続けて歌った後、「青い山脈」の同窓会として、若山セツ子、杉葉子、池部良、伊豆肇が登場し、「青い山脈」の映画の思い出や藤山の吹き込みの思い出などを聞く。「青い山脈」を歌うシーンでは、四番の歌詞に入ると四人も加わり大合唱になる。

第三部“私の心の歌”は、坂本九の”心の歌”「見上げてごらん夜の星を」の思い出話を聞き、歌う。誰でもよく知っている懐かしい歌を全員で歌うお別れの歌は、「赤とんぼ」。

昭和46年10月11日

- ①「ディック・ミネ不滅の青春」 #2
- ②佐川満男、菊池章子、池真理子、初代コロムビア・ローズ、一節太郎、鶴岡雅義と東京ロマンチカ、ディック・ミネ、木暮実千代、望月優子、中村是好
- ③ **(出演順)**（「ダイナ」以外）「無情の夢」(佐川)、「星の流れに」(菊池)、「愛のスイング」(池)、「東京のバスガール」(ローズ)、「浪曲子守唄」(一節)、「小樽のひとよ」(ロマンチカ)、「愛の小窓」(ディック)、「上海ブルース」(ディック)、「或る雨の午後」(ディック)、「長崎エレジー」(ディック)、「夜霧のブルース」(ディック)、「ダイナ」(佐川)、「月光価千金」(望月・中村)、「旅愁」(全員)
- ④ 第一部“思い出のヒット・パレード”では、菊池章子「星の流れに」、池真理子「愛のスイング」といったナツメロを聞かせ、その間を司会の加東大介と山東昭子が綴る。同年10月14日付読売新聞東京版朝刊では、「まったくスレていない加東のおだやかな司会ぶりがまたいい。二児の母親という初代コロムビア・ローズの『東京のバスガール』など、しあわせそうな家庭生活がそのまま茶の間に伝わってくる感じであった。」と、視聴した記者が感想を綴っている。

第二部“今週のハイライト”は「ディック・ミネのコーナー」。サブタイトルの“不滅の青春”の通り若々しく柔らかく数曲を歌う。加東はディックと話をするのは今日がはじめてのため、初対面の挨拶

拶を交わす。「愛の小窓」で始まり、続いて独特の”ミネさん調”の名曲「上海ブルース」「或る雨の午後」「長崎エレジー」のメドレー。その後、「夜霧のブルース」に話題が移り、松竹映画「地獄の顔」出演の思い出話の際にハプニング風にゲストたち（国会図書館所蔵のこの回の台本（準備稿）に具体的な出演者が書かれていないため、木暮実千代以外は不明）が登場。また、当該台本には記載がないが、前掲の読売新聞東京版朝刊の記事では、「ダイナ」を佐川満男が物まねしたとある。

第三部“私の心の歌”では参議院議員の望月優子の“心の歌”を伺う。望月と中村是好が登場し、昭和初期のカジノ・フォーリー時代を思い出しながら「月光価千金」を歌って踊る。

お別れの歌は全員合唱の「旅愁」。

#### 昭和46年10月18日

①「高峰三枝子ゴールデンアルバム」 # 3

②平尾昌晃、織井茂子、藤島桓夫、日野てる子、竹越ひろ子、近江俊郎、高峰三枝子、上原謙、三橋美智也、寺内タケシとブルージーンズ

③ **(出演順)**「星はなんでも知っている」(平尾)、「黒百合の花」(織井)、「月の法善寺横町」(藤島)、「夏の日の思い出」(日野)、「東京流れもの」(竹越)、「湯の町エレジー」(近江)、「湖畔の宿」(高峰)、「純情二重奏」(高峰)、「別れのタンゴ」(高峰)、「南の花嫁さん」(高峰)、「懐しのブルース」(高峰)、「おんな船頭唄」(三橋)、「津軽じょんがら節」(三橋)、「故郷の空」(全員)

④ 第一部“思い出のヒットパレード”は、各出演者が順番に出演、トークの後に歌を歌ってもらう。第二部“今週のハイライト”は、“高峰三枝子ゴールデンアルバム”。冒頭で「湖畔の宿」を歌いトークの後、「純情二重奏」「別れのタンゴ」「南の花嫁さん」のヒット・メドレー。上原謙が加わり、高峰と上原のコンビの思い出を聞く。

第三部“私の心の歌”は、三橋美智也の”心の歌”、「おんな船頭唄」と「津軽じょんがら節」の思い出を聞く。「津軽じょんがら節」は、前半の三味線演奏から後半の寺内タケシのエレキギター伴奏への切り替わりが見もの。

お別れの歌は「故郷の空」を全員で合唱。

#### 昭和46年10月25日

①「三波春夫・魂のうた」 # 4

②若山彰、松山恵子、克美しげる、青山和子、黒沢明とロス・プリモス、二葉あき子、三波春夫、並木路子、吉村朝子

③ **(出演順)**「喜びも悲しみも幾歳月」(若山)、「未練の波止場」(松山)、「さすらい」(克美)、「愛と死をみつめて」(青山)、「ラブユー東京」(ロス・プリモス)、「夜のプラットホーム」(二葉)、「チャンチキおけさ」(三波)、「雪の渡り鳥」(三波)、「船方さんよ」(三波)、「高田屋嘉兵衛」(三波)、「異国の丘」(三波)、「靖国の母」(三波)、「リンゴの唄」(並木)、「この道」(全員)

④ 第一部“思い出のヒットパレード”は、各出演者が順番に出演、トークの後に歌を歌ってもらう。第二部“今週のハイライト”は、“三波春夫魂のうた”。まず、「チャンチキおけさ」「雪の渡り鳥」「船方さんよ」「高田屋嘉兵衛」と、デビュー当時のなつかしいヒット曲と最新の新曲をメドレーに綴って歌う。その後、三波がシベリアでの抑留生活当時、収容所で戦友たちのために「喜劇金色夜叉」

など、いくつかの曲本を書き演出し主演した思い出を語り、加東も”演芸分隊”の思い出を語る。自分の芸が大勢の人たちを喜ばせたこれらの思い出は、現在の仕事の姿勢にもつながっていると見えよう。そして、祖国の土を踏まずに死んだ戦友たちの御霊に捧げる意味で「異国の歌」を歌う。

第三部“私の心の歌”は、視聴者から寄せられた”心の歌”を紹介する。埼玉県在住の吉村朝子さんとお嬢さんが登場。「リンゴの唄」の思い出を綴った吉村の手紙の一部を山東が読み、並木路子が登場。並木は「リンゴの唄」についての自分の思い出を話した後、歌う。

お別れの歌は山田耕筰作曲の「この道」。

#### 昭和46年11月1日

①「三橋美智也・ふるさと慕情」 #5

②内山田洋とクール・ファイブ、小川知子、渡辺マリ、ダーク・ダックス、岡本敦郎、ディック・ミネ、三橋美智也、葦原邦子、加藤峯次

③ **(出演順)**「長崎は今日も雨だった (クール)、「ゆうべの秘密」(小川)、「東京ドドンパ娘」(渡辺)、「北上夜曲」(ダーク)、「白い花の咲く頃」(岡本)「旅姿三人男」(ディック)、「哀愁列車」(三橋)、「リンゴ村から」(三橋)、「夕焼けとんび」(三橋)、「人生の並木路」(三橋・ディック)、「古城」(三橋)、「さようなら」(葦原)、「すみれの花咲く頃」(葦原)、「私の青空」(全員)

④ 第一部“思い出のヒットパレード”は、各出演者が順番に登場し、トークを挟みながら歌を歌ってもらう。

第二部“今週のハイライト”は、“三橋美智也ふるさと慕情”。まず、日本のふるさと、ひなびた田舎の村を舞台に歌ったなつかしいヒット曲「哀愁列車」「リンゴ村から」「夕焼けとんび」をメドレーで歌ってもらう。その後、最近、おもしろいLPを吹き込んだという話を加東が振り、そのLPは新しいレパートリーを入れたもので、昔ディックが歌った「人生の並木路」も入っているとの話題に及ぶ。ディックも話に加わり、二人で「人生の並木路」を歌う。

第三部“私の心の歌”は、視聴者から寄せられた”心の歌”を紹介する。今週は足立区の加藤峯次さんのリクエストで葦原邦子が歌った「さようなら」。山東が加藤さんの手紙を読み、葦原はその歌に対する自分の思い出を語り心を込めて聞いてくれた礼を加藤さんに言い、歌を歌う。その後、葦原自身の心の歌として「すみれの花咲く頃」の思い出を語り、歌う。

お別れの歌は、ディックの大ヒット曲から「私の青空」を全員で合唱する。

#### 昭和46年11月8日

①「島倉千代子・服部メロディーに挑戦！」 #6

②大津美子、ちあきなおみ、山田真二、笹みどり、和田弘とマヒナスターズ、奈良光枝、島倉千代子、服部良一、宮城まり子

③ **(出演順)**「ここに幸あり」(大津)、「雨に濡れた慕情」(ちあき)、「哀愁の街に霧が降る」(山田)、「下町育ち」(笹)、「泣かないで」(マヒナ)、「赤い靴のタンゴ」(奈良)、「小雨の丘」(島倉)、「蘇州夜曲」(島倉)、「銀座カンカン娘」(島倉)、「花の素顔」(島倉)、「夜のプラットホーム」(島倉)、「浜辺の歌」(全員)

④ 第一部“思い出のヒットパレード”は、各出演者から話を聞きながら歌を歌ってもらう。

第二部“今週のハイライト”は、“お千代さん服部メロディーに挑戦！”と題して、ベテランの作曲家と歌手との、はじめての出会いというテーマで送る。「小雨の丘」で幕開け。今まで服部は島倉との縁はほとんどなかったとの紹介の後、服部に対し島倉との初対面の思い出を聞き、島倉に今まで縁のなかった服部作品に今回取り組むことになった動機を聞く。続いて、服部に”泣き”の島倉ぶしと”明るさ”の服部メロディーとの食い違いを感じなかったかを聞く。続いて「蘇州夜曲」「銀座カンカン娘」「花の素顔」の三曲メドレー。最後に、服部の数多い名曲の中で島倉が一番好きな曲という「夜のプラットホーム」を服部の指揮で歌う。

国会図書館所蔵の台本（準備稿）冒頭の出演者欄には第三部に宮城まり子の名があるが、第三部の箇所が破れているため、内容や歌は不明。

エンディングは全員で「浜辺の歌」。

### 昭和46年11月15日

#### ①「村田英雄・男の演歌」 #7

②神戸一郎、千昌夫、藤圭子、松島アキラ、井沢八郎、渡辺はま子、ジョージ・ルイカー、村田英雄、宮城まり子

③（**出演順**）「銀座九丁目水の上」（神戸）、「星影のワルツ」（千）、「女のブルース」（藤）、「湖愁」（松島）、「ああ上野駅」（井沢）、「支那の夜」（渡辺）、「王将」（村田）、「柔道一代」（村田）、「俺は生きる」（村田）、「人生劇場」（村田）、「ガード下の靴みがき」（宮城）、「浜千鳥」（全員）

④ 第一部は広くにっぽんのスタンダード・ナンバーを集めた“ゴールデン・ヒット・パレード”。神戸、千、藤、松島、伊沢、渡辺と順に登場し、5年前日本を離れ、オーストラリアで新しい事業をしているジョージ・ルイカーが珍しいお客様として紹介される。ルイカーは渡辺と同じ横浜生まれで、今日は久しぶりに渡辺に逢ったので是非「支那の夜」を聞きたいとリクエストする。

第二部“今週のハイライト”は、村田英雄の登場で“村田英雄男の演歌”。まず、忘れられないヒット曲と新曲、「王将」「柔道一代」「俺は生きる」をメドレーで聞く。続いて、村田は昭和33年、「無法松の一生」でデビュー、ヒットとなり、翌年「人生劇場」のリバイバルで完全に地位を確立することが紹介される。村田に「人生劇場」の思い出を聞き、「人生劇場」が現在NETテレビにて連続ドラマで放送されているため、山東がそのスタジオを訪問した際のVTRが流れる。VTR中で山東はドラマ出演者にインタビューする。

第三部“私の心の歌”は宮城まり子の”心の歌”「ガード下の靴みがき」。スタジオにガード下セット、宮城が靴みがきの少年、加東が初老の小使いを演じ、宮城が歌う。その後、宮城自身の思い出を語る。

### 昭和46年11月22日

#### ①「オース！バタヤン」 #8

②守屋浩、松尾和子、城卓矢、二宮ゆき子、ロス・インディオス、平野愛子、田端義夫、ジャネス田端、杉狂児

③（**出演順**）「僕は泣いちゃった」（守屋）、「再会」（松尾）、「骨まで愛して」（城）、「まつのき小唄」（二宮）、「知りすぎたのね」（ロス）、「港が見える丘」（平野）、「大利根月夜」（田端義夫）、

昭和46年

「かえり船」(田端義夫)、「玄海ブルース」(田端義夫)、「島育ち」(田端義夫)、  
「親子舟唄」(田端義夫・ジャネス田端)、「二人は若い」(杉)

- ④ 第一部は“ゴールデン・ヒット・パレード”。順番に歌手が登場しトークを行った後に一曲ずつ歌う。  
第二部は”バタヤン”の名で親しまれている田端義夫を迎えての“今週のハイライト”。ギターを抱えて「オース」と気軽に呼びかけるバタヤンは、大衆の中に根を下ろした歌手として、につぼんの歌の歴史を飾る人である。冒頭で「大利根月夜」を歌った後、“海之歌”メドレーとして三曲続けて「かえり船」「玄海ブルース」「島育ち」を歌う。その後、アメリカンスクールに通う11歳の愛娘ジャネスちゃんも共演して田端義夫の人間像を捉える。特にテレビで初めて田端父娘競演で「親子舟唄」をデュエットするのが見もの。  
第三部“私の心の歌”は、杉狂児の”心の歌”、「二人は若い」を特集。山東は、杉が歌も歌うことを今回初めて知ってびっくりしたことを話す。杉と一緒に「二人は若い」を映画の中で掛け合いで歌った星玲子の親戚筋にあたる加東が星の近況を話す。杉は自身の”心の歌”、「二人は若い」を自身で歌う。  
エンディングで全員合唱(曲不明)。

#### 昭和46年11月29日

- ①「淡谷のり子・愛の詩」 #9  
②淡谷のり子、三浦洸一、大津美子、井上ひろし、黛ジュン、畠山みどり、菅原都々子、東千代之介  
③不明  
④詳細不明

#### 昭和46年12月6日

- ①「魅力の低音・フランク永井」 #10  
②曾根史郎、黒沢明とロス・プリモス、三沢あけみ、美川憲一、小林さち子、藤山一郎、フランク永井、灰田勝彦  
③**(出演順)**「若いお巡りさん」(曾根)、「たそがれの銀座」(ロス)、「島のブルース」(三沢)、「柳ヶ瀬ブルース」(美川)、「ウソツキ鴉」(小林)、「丘は花ざかり」(藤山)、「有楽町で逢いましょう」(フランク)、「夜霧の第二国道」(フランク)、「俺は淋しいんだ」(フランク)、「新雪」(フランク・灰田)、「君恋し」(フランク)、「燦めく星座」(灰田)、「森の小径」(全員)  
④ 第一部は、永遠に輝くヒット曲を集めた“ゴールデン・ヒット・パレード”。曾根史郎、黒沢明とロス・プリモス、三沢あけみ、美川憲一、小林さち子、藤山一郎が順番に登場し、トークを行った後に一曲ずつ歌う。  
第二部は日本歌謡史の一頁“今週のハイライト”。今週は、ジャズから歌謡曲に転向・低音の魅力で新しい都会的な歌の世界を作り出したフランク永井の特集で”魅惑の低音 フランク永井”。まずは「有楽町で逢いましょう」「夜霧の第二国道」「俺は淋しいんだ」のヒット・メドレー。次いで山東が、低音のフランクが反対にハイトーンもハイトーン、裏声まで使った灰田勝彦のレパトリーが得意という話を振り、灰田を呼ぶ。そして、「新雪」を一番フランク、二番灰田で歌う。

第三部“私の心の歌”は、灰田の心の歌「燦めく星座」。「燦めく星座」の思い出を灰田に聞き、歌ってもらおう。

エンディングは全員合唱の「森の小径」。

なお、国会図書館所蔵の台本（準備稿）は、12月13日OAの第11回放送分として記載されており、準備稿段階では翌週の放送予定としていたようである。

#### 昭和46年12月13日

- ①「春日八郎・演歌ひとすじ」 #11
- ②春日八郎、高英男、佐川満男、中村晃子、ジェリー藤尾、マヒナスターズ、ペギー葉山、川田正子
- ③不明
- ④詳細不明

#### 昭和46年12月20日

- ①「鶴田浩二・男の詩」 #12
- ②鶴田浩二、水原弘、美樹克彦、藤本二三代、松山恵子、藤島桓夫、三條町子、三木鶏郎、  
デューク・エイセス
- ③不明
- ④詳細不明

#### 昭和46年12月27日

- ①「石原裕次郎・ミリオンセラーズ」 #13
- ②初代コロムビア・ローズ、にしきのあきら、九重佑三子、弘田三枝子、ビリー・バンバン、宝田明、  
石原裕次郎、奥田良三
- ③ **(出演順)**「どうせひろった恋だもの」(ローズ)、「もう恋なのか」(にしきの)、「  
「ウェディング・ドレス」(九重)、「人形の家」(弘田)、「白いブランコ」(ビリー)、  
「美貌の都」(宝田)、「錆びたナイフ」(石原)、「俺は待ってるぜ」(石原)、「二人の世界」(石原)、  
「赤いハンカチ」(宝田・石原)、「夜霧よ今夜も有難う」(石原)、「これぞマドロスの恋」(奥田)、  
「椰子の実」(全員)

- ④ オープニング・メドレーの後の第一部は、誰でもよく知っているにつぼんの歌を集めた“ゴールデン・ヒット・パレード”で、初代コロムビア・ローズ、にしきのあきら、九重佑三子、弘田三枝子、ビリー・バンバン、宝田明が順番に登場し、トークを行った後に一曲ずつ歌う。

第二部“今週のハイライト”は、石原裕次郎を迎えての“裕次郎ミリオンセラー”。まず思い出のミリオンセラーから「錆びたナイフ」「俺は待ってるぜ」「二人の世界」のメドレー。歌の合間に加東、山東、宝田が石原の歌の魅力をそれぞれ語る。

第三部“私の心の歌”は、名テナー奥田良三を迎えて、奥田の”心の歌”「これぞマドロスの恋」の思い出を聞き、歌ってもらおう。

お別れの歌は、奥田がよく歌った「椰子の実」を全員で合唱。

昭和47年

昭和47年1月3日

①「美空ひばり新春歌いぞめ」 #14

②美空ひばり、鹿島密夫

③ **(出演順)**「柔」(美空)、「悲しき口笛」(美空)、「越後獅子の唄」(美空)、「私は街の子」(美空)、「あの丘越えて」(美空)、「リンゴ追分」(美空)、「花笠道中」(美空)、「港町十三番地」(美空)、「哀愁出船」(美空)、「悲しい酒」(美空)、「九段の母」(美空)、「麦と兵隊」(美空)、「戦友の遺骨を抱いて」(美空)、「暁に祈る」(美空)、「唄入り観音経」(美空)、「ひばり仁義」(美空)

④ 今日、年の始めにふさわしく、「につぼんの歌」を代表する大歌手、美空ひばりを迎えて一時間、たっぷり歌ってもらう。

オープニングは「柔」。

第一部は“美空ひばりヒット・パレード”で、デビュー当時から現在までのヒット曲を、「悲しき口笛」から「悲しい酒」まで歌う。司会の二人は、美空が自伝で“わたしは日本の歌をうたう”というはっきりした自覚を持っていることを賞賛し、美空も日本の歌を愛する気持ちを語る。そして、加東はこの番組もまったくそのとおりの精神であることを述べる。また、歌の合間に司会の二人が「これが『につぼんの歌』ですよ！日本人の喜怒哀楽の心ですよ！」(加東)、「素晴らしいですねえ！」(山東)と賞賛する。

第二部は“美空ひばり涙の軍歌集”で、「九段の母」から「暁に祈る」まで。冒頭で加東は、「戦争を経験したすべての人にとって、軍歌や戦時歌謡は、心の底に深い思い出となって残っています。美空さんにとっても、それは幼い日の愛唱歌でした。戦争を知る人はもちろん、戦争を知らない若いみなさんもひとりの日本人、美空ひばりさんの心の歌として、静かに耳をかたむけて下さい。」と語る。歌の合間に美空は、戦時中の思い出を語る。

第三部は、“美空ひばりのお年玉”。美空は浪曲も上手いと加東が話を振り、美空と仲のよかった川田晴久の話題にも及ぶ。そこに川田の愛弟子の鹿島密夫さんが登場する。美空からのお年玉代わりに、鹿島の伴奏で三門博の浪曲「唄入り観音経」のホンのサワリを聞かせる。「唄入り観音経」は美空が子どものころのものまねが上手で、三門を驚かしたという。

最後に、今年の新曲として期待を集めている「ひばり仁義」を歌う。

昭和47年1月10日

①「懐かしのポピュラーソング」 #15

②笈田敏夫、武井義明、旗照夫、ウイリー沖山、松尾和子、ベッツィ&クリス、ジャッキー吉川とブルー・コメッツ、ヒデとロザンナ

③不明

④詳細不明

昭和47年1月17日

①「東海林太郎・オン・ステージ」 #16

②島山みどり、三船浩、森山加代子、ピーター、菅原都々子、林伊佐緒、東海林太郎、西村小楽天、古関裕而、玉木千恵子、音羽ゆりかご会

- ③ **(出演順)**「恋は神代の昔から」(畠山)、「男のブルース」(三船)、「白い蝶のサンバ」(森山)、「夜と朝のあいだに」(ピーター)、「江の島悲歌」(菅原)、「ダンスパーティーの夜」(林)、「赤城の子守唄」(東海林)、「野崎小唄」(東海林)、「上海の街角で」(東海林)、「ああ草枕幾度ぞ」(東海林)、「国境の町」(東海林)、「とんがり帽子」(玉木・音羽)、「谷間のともしび」(全員)
- ④ 第一部は“ゴールデン・ヒット・パレード”。畠山みどり、三船浩、森山加代子、ピーター、菅原都々子、林伊佐緒が順番に登場し、トークを行った後に一曲ずつ歌う。
- 第二部“今週のハイライト”は、歌謡界の最長老東海林太郎を迎え、“東海林太郎オン・ステージ”。長い間東海林の舞台の司会を務めた西村小楽天の名調子に乗せて、折り目正しいステージをそのまま再現する。
- 第三部“私の心の歌”は、作曲家の古関裕而になつかしい「鐘の鳴る丘」の思い出を聞く。当時、東京放送児童合唱団のメンバーで、毎日主題歌の「とんがり帽子」を歌っていた玉木千恵子にも当時の思い出を聞く。
- お別れの歌は「谷間のともしび」を全員合唱。

#### 昭和47年1月24日

- ①「上を向いて歩こう」 #17
- ②坂本九、田谷力三、松島詩子、三浦洸一、黒木憲、久保幸江、榎本美佐江、ダニー飯田とパラダイス・キング、新川二郎
- ③不明
- ④詳細不明

#### 昭和47年1月31日

- ①「花も嵐も踏みこえて」 #18
- ②バーブ佐竹、三沢あけみ、ザ・キング・トーンズ、矢吹健、鈴木三重子、若原一郎、加山雄三、松本めぐみ(加山夫人)、小唄勝太郎、吉崎法夫
- ③ **(出演順)**「ネオン川」(バーブ)、「涙の渡り鳥」(三沢)、「グッドナイト・ベイビー」(キング)、「あなたのブルース」(矢吹)、「愛ちゃんはお嫁に」(鈴木)、「おーい中村くん」(若原)、「夜空を仰いで」(加山)、「お嫁においで」(加山)、「美しいビーナス」(加山)、「旅の夜風」(加山・松本)、「君といつまでも」(加山)
- ④ 第一部“ゴールデン・ヒット・パレード”は、バーブ佐竹、三沢あけみ、ザ・キング・トーンズ、矢吹健、鈴木三重子、若原一郎が順番に登場し、トークを行った後に一曲ずつ歌う。
- 第二部“今週のハイライト”は、“青春といつまでも”と題して加山雄三のワンマンショー。”シンガー・ソングライター”という言葉がなかった頃から加山はずっとそのスタイルで通してきたことを、山東は加東にレクチャーする。歌の合間に、加山と古くから親交がある加東は、素顔の加山像、その好青年ぶり、ガキ大将みたいなところがあった、など昔の話をする。夫人も加わり、若大将も一家の主におさまる年になって、最近ナツメロに興味を持ち始めたという話題を加東が振り、加山は演歌がおもしろくなってきたという話をする。そして、加東のリクエストで加山の父・上原謙に関係のある

昭和47年

「旅の夜風」を夫人とのデュエットも交え歌う。

第三部“私の心の歌”は、福島県の吉崎法夫さんのリクエストで「明日はお発ちか」。

昭和47年2月7日

①「花の演歌三人衆」 #19

②橋幸夫、北島三郎、都はるみ、奥田良三、松崎葉子

③ **(出演順)**「なみだ船」(北島)、「アンコ椿は恋の花」(都)、「潮来笠」(橋)、「いつでも夢を」(橋)、「涙の連絡船」(都)、「函館の女」(北島)、「雨の中の二人」(橋)、「好きになった人」(都)、「仁義」(北島)、「東京の花売娘」(都)、「裏町人生」(橋)、「男の純情」(北島)、「旅姿三人男」(北島)、「名月赤城山」(都)、「大利根月夜」(橋)、「ちゃつきり節」(橋・北島・都)、「椰子の実」(奥田)、「早春賦」(全員)

④ 「にっぽんの歌」の中でも、特に日本人の魂の中から生まれた歌といわれる「演歌」を得意とするトップ歌手、橋幸夫、北島三郎、都はるみの三人を招き、題して“花の演歌三人衆”。自分の持ち歌を披露する他、今もなお日本人の心に生きるなつメロを歌う。

オープニングは北島「なみだ船」、都「アンコ椿は恋の花」、橋「潮来笠」と一曲ずつ歌っての登場。

第一部は「ゴールデン・ヒット・パレード」。歌の合間にデビューするまでの道や歌の道に入ろうと決心したきっかけ、お母さんの思い出などを三人に聞く。曲は「いつでも夢を」(橋)から「仁義」(北島)まで。

第二部「今週のハイライト」では、この演歌三人衆にそれぞれ好きな“なつかしのメロディ”を歌ってもらおう。まずは都会ものの歌を集めて「東京の花売娘」(都)、「裏町人生」(橋)、「男の純情」(北島)の三曲メドレー。続いてガラリとムードを変えて股旅ものメドレー。最後は三人で「ちゃつきり節」を合唱。

第三部「私の心の歌」は、茅ヶ崎市の松崎葉子さんのリクエストによる「椰子の実」。当時小学生だった松崎さんの学校に奥田良三が来て「椰子の実」を歌ってくれた思い出と、もう一度奥田に椰子の実を歌ってほしいという手紙の内容を山東が読む。奥田と松崎が思い出話を披露した後、奥田が「椰子の実」を歌う。なお奥田は第13回に続いての出演となるが、国立国会図書館所蔵の台本には、前回の出演が好評であったため再出演となった旨が書かれている。

お別れの歌は季節にふさわしく「早春賦」を全員で歌う。

昭和47年2月14日

①「きらめく四つの星座」 #20

②倍賞千恵子、青江三奈、舟木一夫、灰田勝彦、川田正子、音羽ゆりかご会、北田悦子

③ **(出演順)**「下町の太陽」(倍賞)、「恍惚のブルース」(青江)、「高校三年生」(舟木)、「燦めく星座」(灰田)、「伊勢佐木町ブルース」(青江)、「北国の街」(舟木)、「さよならはダンスのあとに」(倍賞)、「長崎ブルース」(青江)、「さくら貝の歌」(倍賞)、「絶唱」(舟木)、「ジャワのマンゴ売り」(灰田)、「鈴懸の径」(灰田)、「アルプスの牧場」(灰田)、「お玉杓子は蛙の子」(灰田・舟木・倍賞・青江)、「東京の屋根の下」(灰田)、「お山の杉の子」(川田・音羽)、「新雪」(全員)

④ 先週は歌謡界に輝く大スター達の中から、特に演歌を得意とする三人を迎えて特集したが、今回は

大型スター競演第二弾ということで、都会的な感覚の歌で親しまれている倍賞千恵子、青江三奈、舟木一夫、灰田勝彦の四人を招いての特集で、題して“きらめく四つの歌の星座”。

オープニングは「下町の太陽」（倍賞）、「恍惚のブルース」（青江）、「高校三年生」（舟木）、「燦めく星座」（灰田）と、四人が一曲ずつ歌って登場する。

第一部は舟木、倍賞、青江に、それぞれヒット曲を歌い、歌の合間に加東は舟木、倍賞、青江の順に三人との交遊録を話す。

第二部は灰田を中心に送る。まずは「ジャワのマング売り」「鈴懸の径」「アルプスの牧場」の三曲メドレー。その後、加東は「灰田さん、この番組はね、ハワイやロスアンゼルスでも放送されていて、むこうの日系人のかたがたのあいだでたいへんな人気なんだそうですよ。アメリカの有名な作家のヘンリー・ミラー氏もこの番組のファンなんですって」と話し、続いて山東がロスアンゼルスの中村秋子さんという視聴者からのリクエストの手紙を灰田に渡す。山東は灰田にウクレレを渡し、灰田の弾き語りで、「お玉杓子は蛙の子」をワンコーラスずつ灰田（原語）→舟木→倍賞→青江→四人の順に歌う。最後に東京の町の歌として「東京の屋根の下」を歌う。

第三部“私の心の歌”は、川崎市在住の北田悦子さんのリクエストによる「お山の杉の子」。山東が北田さんの手紙を読み、加東が北田さんに質問をした後、川田正子と音羽ゆりかご会が歌う。

最後は「新雪」を全員で合唱。

#### 昭和47年2月21日

- ①「水原弘・酒こそ我が命」 # 2 1
- ②水原弘、菊池章子、岡本敦郎、竹山逸郎、三島敏夫、ちあきなおみ、ヒデとロザンナ、日吉ミミ
- ③「異国の丘」（竹山）
- ④ ” 私の心の歌” コーナーはアメリカのロサンゼルス近郊に住む一主婦・反田孝子さんのリクエスト「異国の丘」が登場する。反田さんは満州（中国の東北地区）から引揚げ、アメリカに移住した時、引揚げ船の上で歌った「異国の丘」が忘れられない歌となった。当時この歌を歌っていた竹山逸郎は現在胸を病み療養中だが、反田さんの話を聞いてスタジオに現われ「異国の丘」を披露する一方、ロサンゼルスに反田さんに国際電話で声の対面をする。

#### 昭和47年2月28日

- ①「遠藤実・歌も涙もあたたかい」 # 2 2
- ②（**出演順**）藤島桓夫、五月みどり、北原謙二、舟木一夫、扇ひろ子、小野由紀子、山本リンダ、遠藤実、田端義夫、千昌夫、大木英夫、津山洋子、小林旭
- ③「お月さん今晚は」（藤島）、「おひまなら来てね」（五月）、「若い二人」（北原）、「学園広場」（舟木）、「哀愁海峡」（扇）、「他人船」（小野）、「こまっちゃうナ」（山本）、「自作詩朗読」（遠藤）、「出世船」（田端）、「星影のワルツ」（千）、「新宿そだち」（大木、津山）、「ついて来るかい」（小林）、「浅草姉妹」（遠藤）
- ④ 今週から2回にわたって、にっぽんの歌の作り手——作曲家に焦点を合わせた特集を送る。今日は、数々のヒット曲とともに大勢のスター歌手を育て上げ、世に送り出したことでも知られる遠藤実を迎える。

昭和47年

遠藤のヒット曲を年代順に送っていくが、遠藤学校の先輩・扇ひろ子に続いて、新入生の小野由紀子が、やはり先輩の三船和子が歌ってヒットした「他人船」のリバイバル。出演者が全員集合し、遠藤のエピソードを聞く。

山本リンダの「こまっちゃうナ」の後、演歌師時代の思い出に寄せた自作詩を遠藤が朗読する。

千昌夫の「星影のワルツ」の後、遠藤にとって演歌とは何かを司会の加東が聞く。

最後に、病気で今回出演できなかったこまどり姉妹の妹さんが早くよくなるようにはげましをこめて、遠藤が「浅草姉妹」をギターで弾き語りする。

#### 昭和47年3月6日

①「船村徹・巷の唄演歌の心」 #23

②島倉千代子、春日八郎、舟木一夫、コロムビア・ローズ、西来路ひろみ、京山船太郎、船村徹

③不明

④詳細不明

#### 昭和47年3月13日

①「ミネさんと懐かしのジャズ」 #24

②佐良直美、西郷輝彦、朝丘雪路、ディック・ミネ、菌田憲一とデキシーキングス、藤島信人、金子三雄、渡邊浦人、河野ヨシユキ、城北合唱団

③ **(出演順)**「世界は二人のために」(佐良)、「君だけを」(西郷)、「島育ち」(朝丘)、「ダイナ」(ディック)、「星のフラメンコ」(西郷)、「いいじゃないの幸せならば」(佐良)、「ふり向いてもくれない」(朝丘)、「私の好きなもの」(佐良)、「真夏のあらし」(西郷)、「雨がやんだら」(朝丘)、「リンゴの木の下で」(ディック)、「アイルランドの娘」(ディック)、「奥様お手をどうぞ」(ディック)、「黒い瞳」(ディック)、「月光価千金」(全員)、「赤銅鈴之助」(合唱団)、「私の青空」(全員)

④ につぼんの歌の中でも特に、モダンな感覚のものを得意とする佐良直美、西郷輝彦、朝丘雪路、ディック・ミネが出演。

オープニング・パレードは、「世界は二人のために」(佐良)、「君だけを」(西郷)、「島育ち」(朝丘)、「ダイナ」(ディック)と、一曲ずつ歌う。

第一部は西郷、佐良、朝丘がそれぞれヒット曲を歌う。加東は、おなじ歌でも年月をかけて歌いこんでいるうちに、昔の自分の歌を練り直していく楽しさや、細かいところが変わってきたかどうかを三人に聞く。三人の歌の後、ディックが加わり、ディックが学生時代、ジャズバンドで活躍していた頃のジャズポピュラーのヒット曲を聞き、「昔はジャズと歌謡曲が、水と油みたいにはっきり分かれていたが、今はポップス風の流行歌が多くなった」という話題に移る。佐良と西郷に、そういうモダンな「につぼんの歌」として、「私の好きなもの」(佐良)と「真夏のあらし」(西郷)を歌ってもらう。

第二部はジャズソングに燃えるディックの特集。菌田憲一とデキシーキングスの演奏で「リンゴの木の下で」他を歌う。最後は全員で「月光価千金」。

第三部“私の心の歌”は、福岡県太刀洗町の高松禎子さんのリクエストで「赤銅鈴之助」。「赤銅鈴之助」は、ラジオドラマで語り手を務めていた山東にとっても思い出の作品である。関係者のみなさ

んを紹介し、児童合唱団が歌う。

お別れの歌は「私の青空」を全員で合唱。

#### 昭和47年3月20日

①「アイ・ジョージ日本歌曲を歌う」 #25

②伊東ゆかり、美川憲一、鶴岡雅義と東京ロマンチカ、アイ・ジョージ、相川芳郎、森田克子とザ・プリティーズ

③ **(出演順)**「小指の思い出」(伊東)、「柳ヶ瀬ブルース」(美川)、「旅路の人よ」(ロマンチカ)、「硝子のジョニー」(ジョージ)、「恋のしずく」(伊東)、「釧路の夜」(美川)、「君は心の妻だから」(ロマンチカ)、「おんなの朝」(美川)、「北国の町」(ロマンチカ)、「朝のくちづけ」(伊東)、「城ヶ島の雨」(ジョージ)、「荒城の月」(美川・伊東・ロマンチカ・ジョージ)、「戦友」(ジョージ)、「真白き富士の根」(プリティーズ)、「花」(全員)

④ 今回は、「につぼんの歌」の中でも特にユニークな個性が魅力の4人が登場。

オープニングパレードは、「小指の思い出」(伊東)、「柳ヶ瀬ブルース」(美川)、「旅路のひとよ」(ロマンチカ)、「硝子のジョニー」(ジョージ)と、一曲ずつ歌う。

第一部は伊東、美川、東京ロマンチカがそれぞれのヒット曲を歌い、歌の合間にそれぞれの結婚観や家庭の近況を聞く。

第二部“今週のハイライト”は、“アイ・ジョージ 日本歌曲をうたう”。ジョージは日本歌曲のよさについて語り、「城ヶ島の雨」を歌う。続いて、「荒城の月」を一番が美川、二番が伊東、三番をロマンチカ、四番をジョージが歌う。続いてジョージが「戦友」を歌う。

第三部“私の心の歌”は、横須賀市の相川芳郎さんのリクエストで「真白き富士の根」。山東が相川さんの手紙の要点を紹介した後、加東が相川さんにインタビューし、森田克子とザ・プリティーズが歌う。

お別れの歌は、明治時代の日本の歌を作曲した滝廉太郎の作品の中から、春の季節にふさわしく「花」を全員で合唱する。

#### 昭和47年3月27日

①「山田耕筰の世界」 #26

②菅原洋一、内山田洋とクール・ファイブ、岸洋子、山田真梨子、高木東六、中井あきら

③ **(出演順)**「知りたくないの」(菅原)、「長崎は今日も雨だった」(クール)、「私の回転木馬」(岸)、「赤とんぼ」(高木のピアノソロ)、「夜明けのうた」(岸)、「今日でお別れ」(菅原)、「逢わずに愛して」(クール)、「愛の旅路を」(クール)、「忘れな草をあなたに」(菅原)、「希望」(岸)、「からたちの花」(山田)、「待ちぼうけ」(山田)、「野薔薇」(菅原)、「赤とんぼ」(クール)、「中国地方の子守唄」(岸)、「この道」(菅原・岸・山田)、「思案橋ブルース」(クール・中井)、「水色のワルツ」(全員)

④ オープニングパレードは、各出演者が順番に登場し、ワンコーラスずつ披露する(「知りたくないの」(菅原)、「長崎は今日も雨だった」(クール)、「私の回転木馬」(岸)、「赤とんぼ」(高木のピアノ

昭和47年

ソロ))。

第一部は岸洋子の「夜明けのうた」からスタート。

第二部“今週のハイライト”は、“山田耕筰の世界”と題して高木東六の「からたちの花」のピアノソロからスタート。加東は、「いまは故人となられた、作曲家山田耕筰さんは、につぼんの歌の歴史に不滅の光を残す巨大な星です。今日は山田さんの数多い作品の中から、広く愛誦されている童謡風の名曲をいくつかえらんでお送りしましょう。」とナレーションする。ナレーションの後、山田耕筰の未亡人、山田真梨子が「からたちの花」を歌う。ピアノ伴奏は、生前の山田耕筰と親しくしていた作曲家、高木。二人に人間山田耕筰の横顔を聞く。また、菅原洋一が高木のピアノ伴奏で「野薔薇」、クール・ファイブがフルバンドで「赤とんぼ」、岸が高木のピアノ伴奏で「中国地方の子守唄」、最後は高木のピアノ伴奏で菅原・岸・山田が「この道」を歌う。

第三部は、以前同じコーラス・グループのメンバーであった内山田洋と中井あきらの友情物語を聞く。そして、中井にもソロを歌ってもらって“クール・シックス”として本邦初演の「思案橋ブルース」を聞く。

お別れの歌は、高木が出演しているため、高木の名曲「水色のワルツ」を全員で歌う。

#### 昭和47年4月3日

- ①「石原裕次郎・懐メロを歌う」 #27
- ②坂本九、小川知子、ディック・ミネ、石原裕次郎
- ③不明
- ④詳細不明

#### 昭和47年4月10日

- ①「青春哀歌」 #28
- ②石原裕次郎、雪村いづみ、丸山明宏、加藤登紀子、ダーク・ダックス
- ③**(出演順)**「知床旅情」(加藤)、「メケ・メケ」(丸山)、「ともしび」(ダーク)、「青いカナリヤ」(雪村)、「俺は待ってるぜ」(石原)、「あざみの歌」(ダーク)、「琵琶湖周航の歌」(加藤)、「ゴンドラの唄」(丸山)、「リンゴ追分」(雪村)、「帰りたい帰れない」(加藤)、「母さんのうた」(ダーク)、「ひえつき節」(雪村)、「人生劇場」(石原)、「ヨイトマケの唄」(丸山)
- ④ 第一部は加藤登紀子の「知床旅情」からスタート。次いで、昭和32年の大ヒット「メケ・メケ」を丸山明宏が歌い、ダーク・ダックスの「ともしび」と続く。そして、雪村いづみ、石原裕次郎のベテラン二人がデビュー当時のヒット曲を歌う。

第二部“今週のハイライト”は、「につぼんの歌」の中で青春の感傷をうたった抒情的な名曲を特集する“青春哀歌”。歌の合間に司会の加東が各出演者に、につぼんの昔のうた一なつかしのメロディーを、それぞれどう受け止めているかを聞く。曲は、ダーク「あざみの歌」、加藤「琵琶湖周航の歌」、丸山「ゴンドラの唄」、雪村「リンゴ追分」。

第三部は“ふるさとに寄せる慕情”と題し、故郷を想うムードの歌を特集。曲は加藤「帰りたい帰れない」、ダーク「母さんのうた」、雪村「ひえつき節」。

続いて新企画“今月のLP”。石原にこの番組への連続出演をお願いし、今度石原が出す古賀メロ

ディーのLPの中に収められている名曲を生で歌ってもらい、視聴者にこのLPレコードをプレゼントするというもの。加東は石原に”ナツメロ観”を聞く。今週は「人生劇場」を特集。

視聴者からのリクエストにこたえる“リクエスト・コーナー”は、三重県小津市の工藤洵子さんの希望曲、丸山の「ヨイトマケの唄」。丸山にこの歌を作った動機を聞き、丸山が歌う。

#### 昭和47年4月17日

①「高峰・石原の二人の世界」 #29

②高峰三枝子、石原裕次郎、フランク永井、松尾和子、和田弘とマヒナスターズ

③ **(出演順)**「夜霧に消えたチャコ」(フランク)、「誰よりも君を愛す」(松尾)、「ワン・レイニー・ナイト・イン・トーキョー」(マヒナ)、「俺はお前に弱いんだ」(石原)、「湖畔の宿」(高峰)、「二人の世界」(高峰・石原)、「あなたなしでは」(高峰・石原)、「粹な別れ」(高峰・石原)、「おかあさん」(高峰)、「グッドナイト」(松尾・マヒナ)、「夜霧の第二国道」(フランク・マヒナ)、「東京ナイトクラブ」(フランク・松尾)、「人生の並木路」(石原)、「南の花嫁さん」(高峰)

④ ”歌えるスター”石原裕次郎と、3月30・31日に帝劇で催された三十五周年記念リサイタルが大好評であった高峰三枝子を特別ゲストに迎え、その魅力を特集する。

“今週のハイライト”は、“高峰・石原 二人の世界”。二人にお互いのヒット曲をデュエットで歌ってもらい、おしゃべりの方もおまかせして二人きりの世界を作ってもらう。映画を通じての二人の長い間の交友は有名だが、高峰と石原が仕事を兼ねて行ったスペイン旅行の思い出などのエピソードを披露する。そして、「二人の世界」「あなたなしでは」「粹な別れ」をデュエットし、二人で恋愛論などを語り合う。この他、高峰は新曲「おかあさん」を歌う。

また、高峰・石原ご両人に負けずにフランク永井、松尾和子、マヒナスターズにもそれぞれデュエットで歌ってもらう。

“今月のLP”は、石原の古賀メロディのLPの中から「人生の並木路」を生で歌う。また、LPレコードを視聴者にプレゼントする。

視聴者からのリクエストにこたえる“リクエスト・コーナー”は、練馬区の小山澄夫さんの希望曲で、高峰の「南の花嫁さん」。高峰は「南の花嫁さん」の思い出を語り、歌う。

#### 昭和47年4月24日

①「ピンキラ変身！」 #30

②石原裕次郎、灰田勝彦、ピンキーとキラーズ、三橋美智也、布施明

③不明

④詳細不明

#### 昭和47年5月1日

①「哀愁の流し唄」 #31

②石原裕次郎、橋幸夫、由紀さおり、藤圭子

昭和47年

- ③ **(出演順)** 「恋をするなら」(橋)、「圭子の夢は夜開く」(藤)、「夜明けのスキヤット」(由紀)、「俺は待ってるぜ」(石原)、「すみだ川」(由紀・石原)、「流転」(橋)、「湯島の白梅」(藤・橋)、「船頭小唄」(石原)、「恋の町札幌」(石原)、「京都から博多まで」(藤)、「土に還るまで」(由紀)、「子連れ狼」(橋)、「影を慕いて」(石原)
- ④ オープニングは紹介パレード。

第一部では各出演者から話を聞き、歌ってもらう。途中、石原裕次郎と橋幸夫の珍しい顔合わせがあり、二人ともスポーツマンという共通点からスポーツ談義に話が及ぶ。

第二部“今週のハイライト”は、“哀愁の流し歌”と題して、各出演者に和服に衣装がえしてもらい、日本情緒ゆたかな名曲をたっぶりきかせてもらおうという趣向。各歌の冒頭で、司会の加東が口上を入れる。由紀さおりが歌う「すみだ川」では、セリフのタイミングで石原の青年が入り、由紀とともに掛け合いを行い、芝居しながら歌う。「湯島の白梅」は、藤圭子と橋が芝居しながら歌う。和服姿の石原の「船頭小唄」の後、新曲に移る。

第三部“リクエスト・コーナー”は、多くの視聴者から寄せられた「影を慕いて」を取り上げる。この歌はちょうど“今月のLP”になっている石原の古賀メロディーの中にも入っているため、石原に「影を慕いて」の思い出を聞き、石原が歌う。

#### 昭和47年5月8日

- ①「港と恋と故郷と」 # 3 2
- ②田端義夫、春日八郎、島倉千代子、北島三郎、ちあきなおみ
- ③不明
- ④詳細不明

#### 昭和47年5月15日

- ①「ビッグ4・藤山一郎を唄う」 # 3 3
- ②春日八郎、小林旭、青江三奈、都はるみ、藤山一郎
- ③不明
- ④詳細不明

#### 昭和47年5月22日

- ①「大正の歌・ベスト10」 # 3 4
- ②春日八郎、三橋美智也、ペギー葉山、ザ・ピーナッツ、加山雄三
- ③不明
- ④詳細不明

昭和47年5月29日

- ①「きわめつけ股旅名曲集」 #35
- ②高田浩吉、村田英雄、春日八郎、渚ゆう子、園まり
- ③不明
- ④詳細不明

昭和47年6月5日

- ①「森進一・哀愁の古賀メロディー」 #36
- ②森進一、青江三奈、和田弘とマヒナスターズ、二葉あき子
- ③不明
- ④詳細不明

昭和47年6月12日

- ①「懐かしの旅情を歌う」 #37
- ②島倉千代子、都はるみ、菊池章子、フランク永井、ジャッキー吉川とブルー・コメッツ
- ③不明
- ④詳細不明

昭和47年6月19日

- ①「懐かしの唱歌ベスト10・故郷のうたくらべ・明治大正ベスト10」 #38
- ②ダーク・ダックス、ペギー葉山、デューク・エイセス、砂原美智子、坂本博士
- ③ **(出演順)**「われは海の子」(ダーク)、「牧場の朝」(ダーク)、「港」(ペギー)、「汽車」(デューク)、「故郷」(ダーク)、「児島高德」(ダーク)、「元寇」(坂本・ダーク・デューク)、「青葉の笛」(ダーク)、「野なかの薔薇」(砂原)、「ローレライ」(ダーク)、「君の故郷は」(デューク)、「てんさぐの花」(ペギー)、「フェニックスハネムーン」(デューク)、「よさこい節」(ペギー)、「女ひとり」(デューク)、「木曾節」(ペギー)、「いい湯だな」(デューク)、「南部牛追唄」(ペギー)、「ホッフアイホー」(デューク)、「ソーラン節」(ペギー・デューク)、「庭の千草」(砂原)、「故郷の空」(坂本)、「夏は来ぬ」(砂原)、「荒城の月」(坂本・砂原)、「人を恋うる歌」(坂本・ダーク)、「浜辺の歌」(ペギー・デューク)、「宵待草」(砂原)、「ディアボロの歌」(坂本)、「叱られて」(砂原)、「出船の港」(坂本)、「鉄道唱歌」(全員)
- ④ 第一部は、幼い日の思い出に満ちた唱歌の数々の中から、特になじみの深い曲10曲を選んで歌う“懐しの唱歌ベストテン”。歌の合間に各人の唱歌の思い出を聞く。途中、「児島高德」「元寇」「青葉の笛」と、歴史ものの唱歌の代表作を聞く。最後の2曲「野なかの薔薇」「ローレライ」は、もともとは外国の曲だが唱歌になって今はもう日本の歌みたいになっている曲である。

第二部は“故郷の歌くらべ”。新しい日本の故郷の歌を歌い続けてきたデューク・エイセスと、「南国土佐を後にして」で民謡入りの大ヒットを飛ばしたペギー葉山が登場。古い民謡と新しい“日本の歌”とで、新旧の故郷の歌くらべという趣向。デュークの「君の故郷は」の後、沖縄の復帰をお祝い

して南国からスタートし「てんぐさの花」。その後北上していく。歌の合間に、加東、松任谷、砂原美智子、坂本博士、ダーク・ダックスで各人の新旧の故郷の歌の感想を語り合う。

第三部は、前に“大正の歌ベストテン”を特集したところたいへん好評を得たため、砂原・坂本を主演に“明治・大正の歌ベストテン”を特集。「庭の千草」からスタートし“明治の部”を何曲か取り上げた後、“大正の部”として「浜辺の歌」ほかを取り上げる。最後に番外として加東のリクエストにより「鉄道唱歌」を、一番ペギー、二番デューク、三番坂本、四番ダーク、五番砂原、六番を全員で歌う。

#### 昭和47年6月26日

##### ①「加東軍曹従軍記」 #39

②森光子、林伊佐緒、ペギー葉山、藤山一郎、ミュージカルアカデミー、演芸分隊の戦友たち、遺骨収拾団

③ **(出演順)**「出征兵士を送る歌」(林・アカデミー)、「暁に祈る」(アカデミー)、「長崎物語」(ペギー)、「ダンチョネ節」(森)、「懐しのボレロ」(藤山)、「浅草の灯 女心の唄」(加東)、「別れのブルース」(森)、「蘇州夜曲」(ペギー)、「ブンガワソロ」(藤山)、「誰か故郷を想わざる」(アカデミー (ハミング))、「南の島に雪が降る」(林)、「さらばマノクワリ」(全員)、「海ゆかば」(アカデミー・加東・戦友)

④ この番組の司会をしていた加東大介が来週から高島忠夫にバトンタッチするので、最後を飾って加東大介の”心の歌”を特集する。なお、コンビの松任谷国子も松尾ジーナにバトンタッチ。

加東は昭和18年10月8日に召集令状を前進座出演中に受け取り、ニューギニアの戦場に送られた。輸送船で着いた所はニューギニアの西端マノクワリ。野戦病院の勤務になった加東は、希望をなくした兵隊たちの気持ちをやわらげるため「演芸分隊」を組織し班長となり、兵隊たちを慰めた。その思い出を書いた「南の島に雪が降る」はベスト・セラーになり、映画や舞台化されて話題を呼んだ。

番組では、当時の演芸分隊の戦友たち4名を招き、戦地でのエピソードなどを語ってもらうほか、「マノクワリ歌舞伎座」で加東が一度だけ歌った「浅草の灯」の劇中の「女心の唄」を加東が披露する。また、マノクワリ歌舞伎座には楽団もあり、「蘇州夜曲」「別れのブルース」「誰か故郷を想わざる」などが主なレパートリーであった。

また、藤山一郎、林伊佐緒、森光子が歌のゲストとして出演し、慰問団で南方を回った頃の話聞く。

終盤の対談コーナーには、先日マノクワリへ遺骨収拾に行ってきた5名が登場し、現地で撮った8ミリフィルムを見ながら話し合う。

エンディングは、ミュージカル・アカデミー、加東、戦友たちが歌う「海行かば」。加東と松任谷がお別れの挨拶を行った後、加東が新司会者一高島忠夫と松尾ジーナの紹介を行い、二人が挨拶して幕が閉じる。

なお、昭和47年6月29日付朝日新聞西部版・名古屋版朝刊に、「感慨催させるなつメロ番組」(名古屋版は「なつメロ番組が伝える感慨」という見出しで、「画面に写しだされる座談会出席者諸氏の表情そのものに、歳月の流れがきざまれていて、見るものに感慨を催させた」との記者の感想が載っている。